
ミッドウェイ海戦 i f

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッドウェイ海戦if

【コード】

N2061I

【作者名】

零戦

【あらすじ】

ミッドウェイ海戦のifを自分なりに考えました。

第一話 運命の時間

― 1942年6月4日（アメリカ時間）0722時ミッドウエ
― 海域

空母赤城

「敵機イイイ急降下アアア直上オオオー！ツ！！！」

見張り員の悲鳴に近い報告に飛行甲板にいた者達は上空を見た。

ブオオオオー！ツ！！

ヒユウウー！ツ！！

「取り舵一杯急げツ！！」

艦橋で青木大佐が回避命令を出す間合に合わない。

ズガアアアー！ツ！！

ズガアアアー！ツ！！

ズシュウウー！ツ！！

赤城に爆弾が二発命中した。

ドガアアアーンッ!!

格納庫で誘爆が始まった。

「南雲長官ッ!!大丈夫ですかッ?!」

草鹿参謀長が倒れている南雲忠一中将を起こす。

「う、うむ。私は大丈夫だ。ほ、他の艦は無事か?」

南雲がよろよろと立ち上がり、外を見る。

「……………なんてことだ……………」

南雲に目に入っただのは炎上している空母加賀と蒼龍である。

二隻もまた格納庫にばらまかれていた爆弾の誘爆をしている。

「長官。飛龍は無事です。それと赤城から将旗を移して下さい。赤城の火災が激しいです。このままですと……………」

草鹿が南雲に具申する。

「……………」

南雲は無言で頷いて艦橋を降りようとするが、途中で止まった。

「……草鹿。第一航空艦隊司令長官の最後を命じる。三空母の搭乗員を飛龍に集結させる。山口に航空戦の指揮をとれと命令するんだ。俺は水雷戦の指揮をとる。それと山口、後は頼んだぞと加えろッ！」

「……はいッ!!」

草鹿が敬礼する。本当は南雲に危険だと具申したかったが、南雲の眼は決意の眼だった。

南雲は赤城から退艦した。

空母飛龍

「なんとということだッ!!」

飛龍の艦橋で第二航空戦隊司令官の山口多聞少将が怒り狂う。

「…司令官ッ!! 炎上している赤城より発光信号ッ!!」『第一航空艦隊司令長官南雲忠一中将ヨリ最後ノ命令ヲ命ジル。三空母カラ集メラレタ搭乗員ヲ貴艦ガ収容セヨ。航空戦ノ指揮ヲ任セル。俺ハ水雷戦隊ヲ率イル。山口、後ハ頼ンダゾ』以上ですッ!!」

「南雲長官……」

山口はそう呟いて目を閉じる。

「…航空隊の状況は？」

山口は航空参謀の橋口少佐に尋ねる。

「現在、稼働機は零戦十八機、九九式艦爆十八機、九七式艦攻十五機ですが、零戦六機、九七式艦攻五機は修理が必要です。また、赤城の零戦と飛龍から上げていた直掩の零戦の三機の計四機が上空にいます」

「……………」

山口が腕を組んで考える。

「司令官。ご決断をッ！！」

参謀長の伊藤清六中佐が具申する。

カッと山口の目が開いた。

「これより我が艦は、防空戦に移るッ！！！三空母の艦長はなんとかも助けるッ！！！これは命令だッ！！！」

「司令官ッ！！攻撃ではないのですかッ？！」

伊藤が山口に尋ねる。

「まずは空母の乗組員達を救出だ。零戦と九七式艦攻の修理を急がせる」

「司令官ッ！！！」

伊藤はなおも食い下がる。

「……伊藤。敵は飛龍より多い。三隻はいるだろう。そして周りには鉄壁の護衛艦艇がいる。むやみやたらに部下は死なせたくはないのだ。お前なら分かるだろう?」

「……分かりました」

伊藤は頭を下げる。

「伊藤。主力艦隊及び、近藤艦隊に打電だ。空母用の護衛が欲しい。それと近藤艦隊に瑞鳳も急行させるよう言ってくれ」

「はい」

「それと角田さんの第二機動部隊にも打電だ。至急、南下して合流したい」

「分かりました。ですが、角田少将の第二機動部隊はアリユーシャン作戦中です。うまくいけるかどうか……」

「構わん。細萱さんも分かってくれるだろう」

「分かりました。打電します」

通信参謀が慌ただしく艦橋を降りる。

「伊藤。稼動機は全機発艦準備しろ」

「九九式艦爆や九七式艦攻もですか?」

「そうだ。むろん兵装なんかするなよ。九七式艦攻は長い航続距離を活かして艦隊の周囲を索敵する。敵攻撃隊が来たら即座に無電知らせるのだ。九九式艦爆は零戦と共に上空警戒機とする。補用の艦載機も組み立てて準備をするのだ」

「分かりましたッ!!」

伊藤は山口に敬礼して艦橋を降りる。

第二艦隊

「近藤長官。飛龍より入電です」

通信兵が通信紙を近藤信竹中将に渡す。

「……ふむ……面白い……よかろう。飛龍に打電。第二水雷戦隊と瑞鳳に油槽船を送る。それと第一航空艦隊は米航空機の攻撃圏内から退避しろと打電しろ」

「了解ッ!!」

通信兵が下がった後、近藤は微笑んだ。

「南雲の奴……やる気やな。見事敵空母をやれよ」

主力艦隊

「山本長官。飛龍より入電です」

渡辺戦務参謀が山本に通信紙を渡す。

「……むう。南雲の奴米機動部隊に艦隊決戦を挑むだと？」

山本が腹を摩りながら呟く。

まだ回虫に悩まされていた。

「何ですとツ！！空母の救助を優先すべきですツ！！」

黒島亀人参謀が山本に具申する。

「黒島の言う通りです。今の第一航空艦隊の使命は空母の救助です」
参謀長の宇垣少将が意外な言葉を告げる。

「うむ。南雲に伝える。艦隊決戦は中止して炎上している三空母を
何としても救うのだ。むろん護衛艦も送る。第20駆逐隊を派遣せ
よ」

山本の命令はすぐに南雲が元に届いた。

軽巡長良

「何だとツ！！」

長良の艦橋で南雲の怒鳴り声が響いた。

「南雲長官。ここは山本長官の命令に従い空母を救助しましょう」

草鹿も山本の命令に賛成している。

「黙れ草鹿ッ！！俺は三空母が被弾した時点で何処かの最前線に送られるだろ。なら、最後の華くらい咲かせようじゃないかッ！！」

南雲の眼は空母を率いていた慎重な眼ではなかった。

今の南雲の眼は血に飢えている狼である。

「だが、その前に二水戦と合流が先だッ！！」

第一航空艦隊は炎上している三空母の護衛に第四駆逐隊の萩風、舞風、野分、嵐を残し、残りは直ちに第二水雷戦隊と瑞鳳、油槽船と合流するべく速度を上げた。

第二話 防空戦

空母エンタープライズ

「スプルーアンス司令、やりましたッ！！敵空母三隻が炎上しているとの報告ですッ！！」

その瞬間、エンタープライズの艦橋は歓声に包まれた。

艦魂のエンタープライズも安堵の息を出した。

「やりましたか…」

「司令官。我々の勝ちですッ！！」

参謀長のマイルズ・ブローニング大佐がスプルーアンスに言う。

「うむ。だが、まだ一隻ヒリュウが残っている。油断は出来んぞ」

スプルーアンスは緊張が弱まりつつあった艦橋に喝を入れる。

「その通りですね」

参謀達も頷く。

「戻ってきた機体に燃料補給及びに爆装、雷装をするのだ」

スプルーアンスの命令は各部所に伝わった。

1000時までに帰投していた攻撃隊を発艦させた。

飛龍にとどめを刺すために……。

F4Fが二十機、SBDが三十機、TBDが八機の攻撃隊は飛龍を
目指す。

空母飛龍

「飛龍」

士官服を着た女性が大尉の階級を示す搭乗員に呼び止められた。

「何だ？」

「顔、大丈夫か？」

搭乗員に指摘された飛龍はつぐつと顔を濁らす。

よく見ると頬つぺたに水が濁いた後がある。

飛龍は先程まで泣いていたのだ。

「……蒼龍義姉……もう長くないかもしれない。加賀さんも赤城さん
も……」

飛龍はまたグニヤリと顔を歪ませる。

「東雲……俺……俺……」

「……………」

東雲と呼ばれた搭乗員は飛龍を抱きしめた。

「……………赤城さん達の仇は必ず取る。やからお前は安心しとけや」

飛龍は頷く。

「東雲大尉。山口司令がお呼びです」

伝令が来た。

「行くわ」

東雲はふらふらと飛龍に手を振った。

「東雲、入ります」

三沢が艦橋に入ると山口が出迎えてくれた。

「おお、東雲大尉。実は防空戦なんだが……雷撃機は迎撃はしないでほしいのだ」

「どづいつ事でしょうか？」

「うむ、米軍の雷撃機は艦艇の対空砲でも充分通用する。が、艦爆機は急降下してくるのでどうしても照準がしづらいのだ。そこで、零戦と九九式艦爆は敵の艦爆隊を迎撃してほしいのだ。雷撃機はこちらで対処する」

「成る程。分かりました。敵機は生かして帰しませんよ」

三沢の言葉に山口は頷く。

東雲蒼士しのめそうしは日中戦争からのベテランである。

敵機撃墜は五十機以上である。

閑話及第。

1200時

飛龍から約二百キロの地点を飛行していた友永機が何かを見つけた。

「…何だ？」

友永が双眼鏡で見ると、飛行していたのは米攻撃隊だった。

「飛龍に報告だッ！！急げッ！！」

後部座席の機銃手が慌ててキーを叩いた。

空母飛龍

「友永機より入電ッ！！」敵機編隊接近中。戦闘機約二十機、艦爆約三十機、雷撃機約十機ナリ」以上ですッ！！」

山口は即座に動いた。

「零戦、九九式艦爆全機発艦せよッ！！全艦対空戦闘用意ッ！！」

飛龍は増速をし、零戦と九九式艦爆のプロペラが回り出す。

「蒼士ッ！！頼むぞッ！！」

飛龍が発艦しようとする三沢の零戦に『帽振れ』をする。

東雲も軽く手を振り、発艦した。

飛龍から発艦したのは零戦二十六機（補用機と赤城の零戦一機も含む）、九九式艦爆二十二機の四十八機と蒼龍に搭載されていた二式艦偵一機の四十九機が大空に舞い上がった。

（飛龍の補用機は十六機なので四機ずつ戦闘機、艦爆機、艦攻機にしています）

「全機につぐ。艦爆機を狙えッ!!」

東雲はあまり役に立たない航空無線に呼び掛ける。

一応出撃する前に説明しといたがうまくいけるかどうかである。

「太陽を背にして奇襲をかける」

東雲は部下に無線で伝えたと上昇をする。

列機も続いている。

東雲迎撃隊は高度四千、米攻撃隊は高度三千にいた。

「全機突撃やッ!!」

東雲は急降下で突入する。

列機も続く。

敵機編隊はあっという間に迫ってきた。

「落ちろッ!!」

タタタタタタッ!!

ドドドドドドッ!!

機首から七・七ミリ、主翼から二十ミリ機銃弾が放たれて、ドーン
トレスに突き刺さる。

グワアアアーンッ！！

ドントレスが爆発する。

東雲の奇襲に気付いたワイルドキャットは東雲機を銃撃しようとしたが、後から来た列機に落とされた。

初撃でワイルドキャット八機、ドントレス十三機、デバステーター三機が落とされた。

デバステーターを落としたのは九九式艦爆である。

「戦闘機は追うなッ！！敵の艦爆隊を攻撃やッ！！」

東雲はノイズが走る航空無線に部下に指示を与える。

残り十七機になっているドントレスに零戦、九九式艦爆が殺到する。

そこへ、生き残ったワイルドキャットが割り込んでくる。

両者乱れるドッグファイトが開始された。

飛龍を中心とした機動部隊に乱戦から逃れてきた五機のデバステーターが突入してくる。

しかし、機動部隊の砲門は全てデバステーターに向けられていた。

「撃ち方始めッ！！」

ズドオオオーッ！！

ドンドンドンドンッ！！

ドドドドドドドッ！！

グワアアアーンッ！！

グワアアアーンッ！！

五機のデバスターはたちまちに火だるまになり海面に突っ込んだ。

ワイルドキャットやドントレスも零戦や九九式艦爆に阻まれて機動部隊に届かない。

「第一波は守れたな……」

操縦席で東雲が呟く。

既に機体は飛龍に着艦しようとしている。

ズウウンッ！！

東雲は綺麗な三点着艦をする。

東雲は機体を整備員達に任すと艦橋に入った。

「おお、東雲大尉。ご苦労だった」

「ありがとうございます。ですが、あともう一回は来ると思います」

「うむ。九七式艦攻隊もそろそろ帰ってくる。九七式艦攻の代わりは零式水偵がやっている」

「山口司令。無線機は何かありませんか？ノイズばかりかでもう嫌ですよ」

「うむ。内地に帰ったら山本長官に掛け合ってみる」

そこへ通信兵が艦橋に入ってきた。

「零式水偵より入電ッ！！敵攻撃隊約五十機が接近中とのことですッ！！」

「東雲。すまんがすぐに飛び上がってくれ」

「お任せ下さい」

東雲は再び機上の人となった。

午後四時半頃

「一二式艦偵からの報告はどつだ？」

山口が伊藤に聞く。

先程の空襲も難無くとかわした山口は二式艦偵を撤退していく敵攻撃隊の後を付けさせていたのだ。

「二式艦偵からの報告では、敵空母は三、巡洋艦八、駆逐艦十五隻の艦隊とのことです」

「ふむ、南雲さんがどう殴り込みをするかだな。長良に行つて聞いてみるか」

山口は伊藤と二人で長良に乗り込む。

長良艦橋

「おお、山口。防空戦はご苦労だった」

南雲は山口が見えると頭を下げる。

これには山口も驚いた。

「い、いえ、私ではなく搭乗員達のおかげです」

「ハハハ。それもそうだ。ところで山口。お前が来たというのは俺がどう殴り込みかだろ？」

「はい、その通りです」

「二水戦らと合流して補給が完了した後、俺達は敵艦隊に向かう」

「はい、敵もまだ飛龍を撃沈できないのが悔しいらしく艦隊をこちらに向かわせています」

「多分、合流は夜中で補給が完了するのは夜明け前だと思う。夜明けと同時に敵艦隊攻撃をしてくれ。それと護衛の駆逐艦四隻を残して俺は敵艦隊に殴り込みをかける」

「分かりました。それと長官。敵空母は出来るだけ捕獲してくれませんか？我が方も赤城、加賀、蒼龍を失いました」

「うむ、それについては俺も賛成だ。出来るだけ一隻でも捕獲できるように努力はしてみる」

「分かりました」

南雲との会議が終わり、山口は飛龍に帰った。

夜中午前一時頃

「南雲長官、見えました。神通ですッ！！」

味方艦と確認できるように白色吹流を両舷につけさせていた。

「油槽船に横付けだ。補給は素早くするんだッ！！」

そして、第一機動部隊は一時の休息に入った。

第二話 防空戦（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第三話 攻撃隊

午前五時半過ぎ

ババババババツ！！

飛龍の飛行甲板にいた零戦、九九式艦爆、九七式艦攻らが一斉にプロペラを回り始める。

艦橋下山口を囲むように搭乗員達が集結している。

「諸君ッ！！いよいよ我等飛龍航空隊の反撃の時が来たッ！！攻撃の手順は先程言ったようにしてくれッ！！皆の武運を祈るッ！！」

「山口司令官に敬礼ッ！！」

攻撃隊総隊長の村田重治少佐の怒鳴り声とともに搭乗員達が山口に敬礼をする。

そして搭乗員達は己の機体に向かって走り出した。

そして、発着艦指揮所から青い旗が振られた。

『発艦セヨ』の合図だ。

零戦の一番機は制空隊隊長の東雲蒼士だ。

飛龍も防空指揮所で東雲を見守っている。

ブオオオオーンッ！！

東雲機が発艦する。

周りにいる対空火器員達は惜別の意味である『帽振れ』をしている。

攻撃隊は飛龍から零戦二十六機、九九式艦爆二十二機、九七式艦攻十九機、瑞鳳から九七式艦攻十二機の計七十九機が敵機動部隊に向かい、上空警戒機は瑞鳳に搭載している旧式の九六式艦戦十二機である。

長良艦橋にいた南雲はそれを見届けると襲撃部隊の速度を上げさせた。

襲撃部隊

戦艦比叡、榛名。

重巡洋艦利根、筑摩。

軽巡洋艦長良、神通。

駆逐艦親潮、黒潮、雪風、時津風、天津風、不知火、霞、陽炎、霞、秋雲、夕雲、巻雲、風雲、谷風、浦風、浜風、磯風。

が参加し、空母の護衛に残ったのは第四駆逐隊の萩風、舞風、野分、

嵐の四隻である。

「…蒼士…。死ぬなよ…」

既に豆粒くらいになった攻撃隊を飛龍が見送る。

敵米機動部隊は第一機動部隊よりやや北方の三百キロの海域にいた。
(米機動部隊が第一機動部隊に接近しているからである)

空母エンタープライズ

「スプルーアンス司令官。攻撃隊の発進時刻は午前七時過ぎです」

「うむ、出来るだけ早く準備を急がせろ。何と少しでも空母ヒリュウを沈めるのだッ!!」

米機動部隊は戦闘機四十、艦爆三十八、艦攻十二機の九十機を飛龍に向かわせようとしていた。

その頃、エンタープライズの防空指揮所で艦魂であるエンタープライズは海を眺めていた。

「…………嫌な予感がするな」

男勝りでシヨートヘアのエンタープライズは軽巡や駆逐艦の艦魂達から絶大な人気を得ている。

「お姉ちゃん。嫌な予感って?」

そこへ、ツインテールの少女とポニーテールの少女が来た。

「ヨーク姉。ホーネット」

「……やはりジャップは来ると思う……」

頭に包帯を巻いているポニーテールのヨークタウンがボソツと言う。

「ああ。多分な……」

「私は…日本と戦うのは嫌だな……」

ポツリとホーネットが言葉を漏らす。

「私達のアメリカは歴史は浅いけど、日本は約二千年の歴史もあるし武士道だってあるし……」

ホーネットは親日派なのだ。

「ホーネットの親日も聞き慣れたけどな。けど忘れるなよ?俺達は今そのジャップと戦っているんだ」

「うん。それは分かっているよ……」

シユンとホーネットがしよげる。

そこからは何となく気まずい雰囲気になった防空指揮所は各々解散となる。

午前六時半過ぎ

ピコーンッ！！ピコーンッ！！

「うん？」

エンタープライズのレーダー員が反応する。

レーダーが南方から点滅して接近してくる編隊を見つけたのだ。

「敵機来襲ですッ！！」

報告はすぐさまスプルーアンスに伝えられた。

「先手を打たれたかッ！！迎撃隊を発進させるッ！！それと攻撃隊を発進させるッ！！」

「しかし、司令官。まだ準備ができていませんッ！！」

「できてる機を発進させるんだッ！！」

エンタープライズの艦橋が俄かに騒ぎ始める。

迎撃隊としてF4Fが二十機飛び立ち、攻撃隊としてF4Fが十八、ドントレス二十機が発進する。

発進した直後に村田重治少佐以下の攻撃隊が米機動部隊に襲い掛かった。

東雲蒼士機

「進藤の六機は敵攻撃隊に向かうんやッ！！残りは敵の迎撃隊に向かえッ！！」

蒼士は進藤三郎大尉にジエスチャーを送り、進藤は頷き、五機の列機を率いて攻撃に向かう。

「行くでッ！！」

蒼士は速度を最大の五百三十三キロに上げて敵迎撃隊の中に突入した。

村田重治少佐機

「艦攻隊は敵護衛艦艇を狙えッ！！江草ッ！！空母は任したぞッ！！」

村田は操縦席から江草機に向かって手を振る。

江草は頷き、高度をさらに上げる。

村田も列機を率いて高度を下げる。

ドンドンドンドントッ！！

ダダダダダダダッ！！

空母を取り巻く護衛艦艇から対空砲火が放たれているが、村田はひよいひよいとかわす。

「三機一個小隊に分かれて攻撃だッ！！」

平山一飛曹が列機に打電する。

一機余るが仕方ない。

村田の小隊だけ四機となる。

「敵艦との距離千八百……千六百……千四百……千二百……千……」
星野が距離を測定し、千メートルになった時、村田は投下索を引いた。

「赤城の仇だッ！！撃エエエーッ！！」

ヒュウウウ…ザブンッ！！

反動を利用し、上昇している時に、三番機がやられた。

グワアアアーンッ！！

だが、三番機の想いが託された魚雷は駆逐艦に向かう。

ズシューウウーンッ！！

ズシューウウーッ!!

魚雷が命中した駆逐艦は瞬く間に沈没する。

魚雷を回避するため一時対空砲火が下火になるのを艦爆隊隊長の江草隆繁は見逃さなかった。

「突撃ッ!!」

キイイーッ!!

二十二機の艦爆は三隻の空母に急降下を敢行する。

「撃エエエーッ!!」

ヒュウウーッ!!

ズガアアーッ!!

ズガアアーッ!!

三隻の空母は次々と炎上する。

奇しくも赤城達のように……。

格納庫にまだ爆弾や魚雷が転がっていたので誘爆を始める。

「スプルーアンス司令官ッ!!三空母とも飛行甲板被弾のため発着艦不能ッ!!」

ブローニング参謀長がスプルーアンスに報告する。

「艦艇の被害は？」

「重巡一、軽巡一が大破航行不能です。駆逐艦四隻、重巡一隻が沈没です」

「ほぼ艦艇の半数がやられたか……」

スプルーアンスぎりぎり拳を握りしめる。

「ジャップ攻撃に向かった攻撃隊は？」

「ジーク六機に攻撃されるもワイルドキャット十三機、ドントレス十四機が向かっています」

ブローニングが報告する。

「分かった。奴らでゲームを終わらせてはならんッ！！」

スプルーアンスの怒号がエンタープライズの艦橋に響いた。

空母飛龍

「山口司令ッ！！攻撃隊より入電ッ！！」敵空母三炎上ス。敵護衛艦艇半数ヲ撃沈破ス」ですッ！！」

飛龍の艦橋が歓声に変わった。

そこへ、新たな通信兵が来た。

「村田少佐より入電ッ！！敵攻撃隊が我が飛龍に向かっているとのことですよッ！！数は戦闘機十三機、艦爆十四機です」

山口は頷く。

「よし、迎撃準備だッ！！」

山口の一言で飛龍の艦橋はざわつき出す。

「伊藤、村田に打電だ。零戦を何機か急いで帰らせるんだ」

「分かりました」

やはり九六式艦戦では苦戦するだろう。

村田から、零戦十八機を向かわすと返電が来た。

午前八時半過ぎ

「零式水偵より入電ッ！！敵攻撃隊接近ッ！！」

山口は即座に命令を下す。

「瑞鳳に下命ッ！！迎撃隊全機発艦ッ！！」

そして瑞鳳から九六式艦戦が発艦していく。

九六式艦戦の迎撃隊隊長の三沢大尉は奇襲を考えた。

「急降下でやるか」

敵機はまだ来てない。

九六式艦戦十二機は急いで奇襲するべく上昇する。

そして充分高度を確保した時、三沢は敵攻撃隊を見つけた。

「行くぞッ!!」

三沢はバンクして急降下を開始する。

列機も同様である。

タタタタタタッ!!

軽快な音を立てて、七・七ミリ機銃弾がドントレスの左主翼付け根に吸い込まれた。

ポウツ……グワアアーンツ!!

九六式艦戦の奇襲で米攻撃隊が乱れた。

初撃でドントレス四機、ワイルドキャット二機を撃ち落とす。

「敵戦闘機は追うなッ!! 敵艦爆を撃ち落とすんだッ!!」

三沢がノイズが走る無線に怒鳴る。

聞こえないが何故か言っておきたかった。

九六式艦戦十二機はワイルドキャットに阻まれながらもドーンとレス落とそうとするが爆撃地点に来たのか、残りの十機が一斉に急降下に移った。

「しまったッ!!」

三沢は操縦席で舌打ちをした。

空母飛龍

「敵イイイ急降下アアア直上オオオーーッ!!」

見張り員の絶叫が飛龍を襲う。

「取り舵一杯ッ!!」

飛龍艦長の加来止男大佐が回避命令を出す。

ググウウツと飛龍の艦体が傾く。

「落ちろオオオーーッ!!」

防空指揮所で飛龍が刀を振るう。

三機を落としたが二機が爆弾を投下した。

ヒュウウウーッ！！

「ーッ！！！」

飛龍は目をつむる。

ズシュウウーッ！！

ズガアアーッ！！

「ゴフウウッ！！」

飛龍は口から吐血した。

飛龍の被害はそれだけだ。

命中した箇所が飛行甲板の外れのほうであったためだ。

だが、瑞鳳はそうではない。

三発は避けたが、二発が命中したのだ。

「ウウウ……」

肩から、腹からも血を流し、防空指揮所の床に横たわった。

そこへ、飛龍が転移してきた。

「瑞鳳ッ！！しっかりしろッ！！」

「……て……てき……は……？」

「大丈夫だ。引き揚げたみたいだ」

「そっ……です……か」

ガクリと瑞鳳は気絶した。

飛龍艦橋

「瑞鳳より連絡。飛行甲板発着艦不能です」

通信兵が山口に報告する。

「やむを得えんな。零戦は間に合わなかったがなんとか守れたな。九六式艦戦を飛龍で収容するが飛行甲板は大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。爆弾が飛行甲板の外れのほうに命中したのが幸いでした」

「ならいい。九六式艦戦を収容しろ」

山口の命令で、九六式艦戦は次々と着艦を始めた。

空母エンタープライズ

「ヨークタウンの状況はどうだ？」

「後、三十分もすれば鎮火するとのことですよ」

スプルーアンスの問いにブローニング参謀長が答える。

ヨークタウンは珊瑚海海戦の損傷のせいで海戦前はボロボロだった。

そこへ、急降下爆撃を受けてさらに傷口が広がったのだ。

「…もう昼か…」

既に時刻は、一時頃であるがまだ戦闘食を食べていない。

スプルーアンスは副官に命じて戦闘食を持って来させた。

今日の戦闘配食はサンドイッチとコーヒーのようだ。

喉の渴きを潤すためにコーヒーを飲もうとした時、通信兵が艦橋に駆け込んできた。

「大変ですッ！！前方の駆逐艦より入電ッ！！敵艦隊ですッ！！」

「何イイイーーーーッ！！」

バシヤツとコーヒーが零れた。

「アツツウウツッ！！数はッ！！」

スプルーアンスが熱さに堪えながら問う。

「戦艦らしき艦二隻を含む大艦隊ですッ！！距離約八十キロッ！！」
エンタープライズの艦橋は騒然となった。

戦艦榛名

「敵機動部隊視認ッ！！」

見張り員から報告させる。

「全艦突撃だアアアアアアッ！！」

戦艦榛名の艦橋で南雲忠一中将が吠えた。

第三話 攻撃隊（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第四話 殴り込み

空母エンタープライズ

「経路反転百八十度ッ！！全艦最大全速ッ！！」

スプルーアンスが即座に吠える。

「駄目ですッ！！ヨークタウンの修理がまだ終わっていませんッ！！」

ブローニングが反対する。

「しかし、このままだとやられるぞ」

「やむを得ません。護衛艦艇で時間を稼ぐしかありません」

ブローニングがきっぱりと答える。

「……仕方ない。キンケードに連絡。時間を稼ぐんだ。それとヨークタウンにも急ぎ修理を終わらせるように連絡しろ」

「イエッサーッ！！」

この時、空母ヨークタウンは機関故障のため速度十ノットで航行していた。

そこを突かれたのだ。

戦艦榛名

「ようやく捕えたぞ。米機動部隊ッ！！赤城達の仇だッ！！」

榛名の防空指揮所で、シヨートヘアの髪型をした艦魂の榛名が日本刀をシャキンと抜刀する。

「全艦突撃ッ！！一隻足りとも撃ち漏らすなッ！！」

榛名が吠えると、軽巡長良と神通が駆逐艦を率いて最大全速で突撃を開始した。

重巡ニューオーリンズ

「主砲撃てッ！！」

艦長の命令が主砲塔に伝わり、前部に備えられている二十・三センチ三連装砲二基が唸りを上げた。

ズオオオーンッ！！

砲弾は先頭を航行している軽巡を襲うが、遠弾となる。

「当たらなくてもいいッ！！奴らを近づけさせるなッ！！」

重巡ニューオーリンズの艦橋でキンケード少将が艦長に伝える。

二番艦のアストリアも主砲を撃ち出した。

軽巡神通

ヒュウウウ……ズシュウウーッ！！ズシュウウーッ！！

「ぬづうう……」

神通の艦橋で第二水雷戦隊司令官田中頼三少将が唸る。

「敵との距離は？」

「一万五千です」

見張り員からの報告に田中は考える。

ここからでも必殺の酸素魚雷を発射したほうがいいのか？

田中の頭の中にある海戦が過ぎった。

スラバヤ沖海戦である。

追撃戦時に味方の魚雷の多数が自爆したのだ。

これは単に魚雷の伸管を敏感にしてたからだ。

田中は魚雷を敏感にし過ぎないように命じた。

「これより雷撃戦を行う。ただし、敵艦との距離が八千以下になつてからだッ!!」

この命令はただちに伝えられ、距離を詰めるべく舵を切る。

重巡ニューオーリンズ

「魚雷戦か?そんなことはさせるかッ!!全艦撃つて撃つて撃ちまくれッ!!」

その時、ニューオーリンズの艦橋に重巡以上の砲声が鳴り響いた。

ズドオオオーンッ!!

ズドオオオーンッ!!

ヒュウウウ……ズシユウウーッ!!ズシユウウーッ!!

ニューオーリンズの艦体が揺れた。

「な、何だッ?!!」

「敵水雷戦隊後方より戦艦接近ッ!!距離二万七千ッ!!巡洋戦艦のコンゴウ級ですッ!!」

キンケードは見張り員からの報告にしばし、啞然としてしまった。

こちらには戦艦はいない。

最新鋭のワシントンやノースカロライナ、サウス・ダコタといった戦艦五隻がいるが、まだ大西洋にいた。

太平洋にいた老齢戦艦部隊は真珠湾で全滅させられた。

太平洋にいる重巡は貴重な存在である。

キンケードは一瞬、反転を命じようと考えた。

だが、ニューオーリンズに榛名から放たれた三十五・六センチ砲弾が後部主砲塔に命中した。

ズガアアアーンッ！！

「ウワアアアッ！！」

キンケードは床に叩きつけられた。

その際に、右手首を骨折してしまった。

このため、一時指揮が取れなくなってしまった。

それを南雲中将は見逃さなかった。

「敵は混乱しているぞッ！！田中今だッ！！」

南雲の声が届いたのか、第二水雷戦隊と米艦隊との距離が八千を切った。

「距離七千八百ツ!!」

「魚雷戦用意ツ!!」

神通の水雷長が照準をする。

「方位角右七十度。敵速二十五ノット。速度三十」

「予調尺三十ツ!!」

「撃エエエーッ!!」

水雷長が発射ボタンを押した。

バシユンツバシユンツ!!

右舷から八本の酸素魚雷が放たれる。

シャアアアーッ!!

後続艦の駆逐艦も魚雷を次々と撃ち出した。

だがうまく走っていた魚雷が、何本か爆発しだした。

「ぬう……。敏感にした艦いたようだな」

「はい、しかし爆発したのも六本だけです。期待は出来ると思いますが」

田中の呟きに参謀長が口を挟む。

その時、敵艦の舷で、水柱が上がった。

ズシューウウーーンッ！！

ズシューウウーーンッ！！

「魚雷命中ッ！！」

見張り員が歓喜の報告を伝える。

「どつやら多数の艦に命中したようだな」

「皆、腕を上げました」

田中が満足そうに頷く。

「残存の敵艦重巡一、駆逐艦二隻です。三隻とも魚雷により損傷しています」

見張り員が報告する。

「降伏するのか問い合わせる。した場合は長良の木村少将に任せて我々は敵機動部隊を追う」

ほどなく、生き残っていた重巡アストリアから『我、降伏ス』の電

文が届き、三隻から白旗が掲げられた。

木村少将からの報告に南雲は駆逐艦四隻を付けて、飛龍まで付き添えと電文を送り、残りの艦艇は殴り込み部隊の後方に付き、逃走してきた艦を撃破しろと伝えた。

戦艦榛名

「敵機動部隊視認ッ!!」

見張り員からの報告に南雲はニヤリッと笑った。

「榛名と霧島を先頭にして突撃するッ!!艦長、最大全速ッ!!」

桁外れの命令に草鹿参謀長は目を見開いて驚いた。

「長官。よろしいのですか?今ここで貴重な高速戦艦を犠牲にするような行為は……」

「馬鹿野郎ッ!!戦艦は何のために生まれてきた?敵艦と戦うためだろうがッ!!今ここで突撃しなければいつ撃ち合うのだッ?!」

「……ッ!!」

南雲の怒号に草鹿と傍らにいた源田実や大石保先任参謀達は振るえ上がった。

この南雲は赤城にいた頃のおどおどし、慎重の南雲ではない。

「重巡ビンセンス被弾ッ！！ビンセンスより発光信号ッ！！ビンセンス航行不能オオオーッ！！！！」

ズシューウウーッ！！

「駆逐艦ラッセル被雷ッ！！ラッセル沈没しますッ！！」

殴り込み部隊は自由自在に米機動部隊の陣内を駆け巡って行く。

「……………これがアドミラルトーゴの子孫達の戦いか……………」

スプルーアンスの呟きはブローニング参謀達には聞こえなかった。

その時、エンタープライズより八百メートル離れている榛名から発光信号が出た。

「スプルーアンス司令官。敵の旗艦より信号。『降伏セヨ』です」

スプルーアンスはしばし、目を閉じて考えた。

「……………降伏しよう。敵旗艦に信号を送れ。『降伏ヲ受け入レル』とな」

ここに壮絶なミッドウェイ海戦は幕を閉じた。

第四話 殴り込み（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（
|
）m

後、一話で終わりです。

第五話 結果

戦艦大和

「山本長官。榛名から入電です。『我、敵機動部隊ヲ捕獲セリ。我、コレヨリ帰投ス』以上です」

通信兵が山本達に報告する。

「『直子二大和二出頭セヨ』と南雲君に返電しといてくれ」

山本の返電は直ちに榛名に伝えられた。

「……南雲長官……」

電文を見ている南雲に草鹿が声を掛ける。

「……草鹿、今まで苦勞をかけたな。なあに、後任には航空屋で知られる小沢を推しといてやる。俺からのせめての償いだな」

南雲は臨時の長官室に帰っていった。

空母飛龍

飛龍に着艦した東雲蒼士は飛龍を探していた。

「たくつ……何処に行ったんや？」

ぶつくさと蒼士が歩いていたら、前方から水兵の服を着た少女がきた。

「あれ？巻雲やん。どないしたん？」

巻雲と呼ばれた少女は蒼士に気付いた。

「あつ蒼士さん」

ペコツと巻雲が蒼士に頭を下げる。

「蒼士さん。飛龍さんを見ませんでしたか？」

「いや、俺も探していんねんけど見当たらんねん」

そこへ光りが現れ、飛龍が転移してきた。

「巻雲。どうかしたのか？」

「榛名さんより伝令です。至急、榛名の第三会議室に来てほしいとのことですよ。内容は捕獲した米艦艇と簡単な自己紹介をするということです」

ピクツと飛龍の肩が動いたが、巻雲は気付かない。

逆に蒼士は気付いていた。

「分かった。今から行く」

飛龍は再び転移した。

「では、蒼土さん。私も失礼しま「ちよいまち」…はい？」

巻雲が転移しようとした時、蒼土が止めた。

「どうしました？」

「俺も榛名の第三会議室に連れて行ってくれ」

「え？何ですか？」

「飛龍が気になるねん。もしかしたら飛龍の奴、蒼龍の……」

蒼土がそこまで言った時、巻雲も分かったのか蒼土の手を取ると一
緒に榛名に転移した。

戦艦榛名第三会議室

パアアアと飛龍は榛名の第三会議室の目の前に転移した。

「……………」

飛龍は無言で懐から必勝の日の丸が描いている八チマキを巻いた。

「蒼龍義姉……仇はとるぞ」

ガチャと飛龍は扉を開けた。

「ん？飛龍か。遅かった……」

榛名は入ってきた飛龍に目を疑った。

何故なら必勝の八チマキをし、日本刀を携えながらきたのだ。

「……………」

しかも無言である。

榛名は一応の戦闘態勢をして飛龍を座らせた。

「さて、貴様ら米艦艇は修理と少々の改装後、我等大日本帝國海軍連合艦隊に編入されるだろう」

榛名が一旦言葉を切る。

「まあ今日はやかくとは言わん。少しながら酒を用意した。日本の酒を味わってくれ」

榛名がそこまで言った時、飛龍が立ち上がった。

「……………米空母はどいつだ？」

呼ばれたヨークタウン達は顔を見回すが首を傾げて立ち上がる。

「何だよ？何か用か？」

挑発の言葉でエンタープライズが飛龍を牽制した。

「……そうか……。貴様らが……」

ブルブルと飛龍が肩を震わせる。

「ああ？何だよ？俺達が恐ろしいのか？」

にやけながらエンタープライズがまたも挑発する。

「……エンター。止めなさい」

長女のヨークタウンがエンタープライズを抑える。

「でもよ姉貴。こいつ何をしたい『シャキンッ！』……何？」

エンタープライズが飛龍を見ると飛龍は日本刀を抜いていた。

『……ッ！……！』

会議室にいた者全員に緊張が走った。

「……蒼龍義姉の……蒼龍義姉の仇だアアア……ッ！……！」

飛龍は刀を振り上げてエンター達に詰め寄る。

「チツ!!」

エンタープライズが拳銃を取り出して構えようとするが間に合わない。

「ハアアアアーーーーッ!!!」

飛龍が刀を振り下ろそうとした時、目の前で光りが現れた。

「ーーーーッ!!」

転移してきたのは巻雲と蒼土である。

突然のことで飛龍は刀を止めることが出来ず、蒼土を斬ろうとする。

その時だった。

パシィッ!!

蒼土が飛龍の刀の刃を両手で押さえた。

「…真剣…」

「…白羽取り…」

榛名とホーネットが呟いた。

「むんッ!!」

蒼土は飛龍の手を叩き、飛龍は刀を落とした。

「ハアアアッ!!」

蒼士はそのまま飛龍の右手を脇に差し込み、一本背負いを決めた。

「クウウッ!!」

受け身を取れてなかった飛龍が痛さに顔を歪める。

「蒼士、すまない。まさか飛龍がこんなことをするとは……」

「ええよええよ。エンタープライズやっけ？お前も大丈夫か？」

「あ、ああ」

「よし。それにしても飛龍。お前、今何したか分かつとんのか？」

「こいつらのせいで蒼龍義姉が……」

「こいつらを斬っても蒼龍や赤城達は帰ってこえへんで」

「……………」

蒼士からの容赦ない言葉に飛龍は黙ってしまふ。

「お前も分かつてるやろ？」

「……分かつてる。分かつてるけど……どうしても認めたくはないんだ……」

飛龍は眼に涙を溜めていた。

はあと蒼士は溜息をついて、飛龍を抱き寄せた。

「そ、蒼士ッ！！」

飛龍がボンと顔を真っ赤にする。

「なら、俺んところで泣いとけや。俺の胸やったらいつでも貸したるわ」

蒼士の言葉にぼろぼろと飛龍は涙を流した。

「ウツ…ウツ……」

飛龍は声を殺して泣いた。

何分たったのか。

ようやく飛龍は泣き止んだ。

「…すまない榛名さん。我を忘れて復讐ばかりの事を考えていた」

「フツ。気にする事はない。（蒼士の胸で泣くなんて羨ましいぞッ
！…）」

「…エンタープライズ。すまなかった」

飛龍がエンタープライズに頭を下げた。

「い、いや、いいよ。は、恥ずかしいだろッ!!」

若干照れながらエンタープライズが飛龍を許した。

「ハハハ。エンタープライズ可愛いな」

蒼土が苦笑して、エンタープライズの頭を撫でた。

「ーッ!!!!」

ボンツとエンタープライズは顔を真っ赤した。

飛龍達はエンタープライズを羨ましそうに眺めていた。

戦艦大和

主力部隊と合流した第一機動部隊と米艦艇。

第一航空艦隊司令長官の南雲忠一中将は戦艦大和に出頭した。

「南雲。入ります」

「うむ」

南雲は大和の長官室に入った。

「まあご苦労様だった」

山本が南雲に労いの言葉をかけた。

「早速、本題に入るが南雲。君が俺の命令を無視したのは命令違反に当たる」

「そうですね。本職はもはや思い残す事は何もございません」

南雲ははっきりと言った。

「……本来なら赤城、加賀、蒼龍の三空母の責任を取って止めてもらう……が、君は残存の艦艇と第二水雷戦隊を率いて米機動部隊を捕獲するという実績を上げた。そこでだ」

山本は立ち上がった。

「……ラバウルに新しく新艦隊を発足させる予定なのだが、君に任したいのだがどうかね？」

南雲は驚愕だった。

「……分かりました。謹んでお受けいたします」

「うむ、後任なのだが誰がいいと思うかね？」

「それならば、小沢がよろしいかと思えます」

南雲は即答であった。

「分かった。南雲君今までご苦労だった」

「は。恐縮です」

南雲は山本に深々と最敬礼をして長官室を出た。

だが、南雲の顔は苦虫を潰した顔だった。

「……敗者は最前線で死なすか……。だがそれも望むところだ」

南雲は新たな決意をして大和に与えられた部屋に戻った。

第五話 結果（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm) (m

ご要望がありましたら第一次ソロモン、南太平洋、マリアナ沖、レイテ沖の海戦のifを書こうと思います。

話しの内容はこのミッドウェイからの続きからです。

まあ、自分がもしかしたら書くかもしれないけどf^|^ ;

ご要望で執筆するとしても今、忙しい時期なので遅くなると思います。

第一話 餓島（前書き）

要望によりミッドウェイ海戦ifからの続きで第二次ソロモン海戦です。

将斗「史実の第三次ソロモン海戦なのに勘違いしたくせに……」

それを言うな（T―T）

第一話 餓島

1942年11月10日、ブーゲンビル島沖合

そこには約二十隻程の艦艇が航行していた。

「……ガ島攻防は既に三ヶ月か……」

艦隊の中心にいる戦艦長門の艦橋で第八艦隊司令長官の南雲忠一中将が呟く。

1942年8月7日に米軍がガダルカナル島に上陸した。

重巡鳥海を旗艦とした南雲中将の第八艦隊は、即座に出撃。

夜半、ガ島泊地を強襲した。

第八艦隊の被害は鳥海が小破しただけ。

米軍は重巡五隻（史実＋重巡シカゴ）、駆逐艦二隻、輸送船九隻を撃沈した。

さらに、南雲中将は輸送船が海岸に降ろした積み荷である食糧や武器弾薬、医療具に向けて艦砲射撃を展開して積み荷の大半を燃やした。

そのおかげで米軍は得意の物量戦術がとれないでいた。（それでも武器弾薬は日本軍が思っていたより多めだが）

しかし、陸軍はガ島の米軍を過小評価をして史実通りに一木支隊、川口支隊が壊滅した。

そして陸軍は遂に丸山政男中将を師団長とした第二師団をガダルカナル島に派遣する事を決定した。

10月13日、戦艦金剛、榛名を筆頭にした栗田中将の挺身攻撃隊がガダルカナル島のヘンダーソン飛行場を艦砲射撃をした。

この攻撃でヘンダーソン飛行場は数日間は機能せず、第二師団と陸戦隊が上陸した。

10月26日、ガダルカナル島近海で空母対決が行われた。

小沢治三郎中将の第三艦隊は空母翔鶴、瑞鶴、飛龍、修理改装したエンタープライズエントープライズ、ホネネットホネネット、蒼鶴、神鶴、瑞鳳の六隻を率いた。

対するキンケード中将の空母はサラトガにワズプ、護衛空母二隻だけである。

日本軍の攻撃は四波にもおよび、キンケード機動部隊の空母は全滅した。

第三艦隊の被害は航空機約六十機喪失と翔鶴が中破した。

小沢中将は搭乗員育成と内地の燃料枯渇のために大型空母による輸

送船団の護衛を山本五十六に具申した。

山本も承諾して、空母翔鶴、瑞鶴、神鶴、ヨークタウン雷鶴が輸送船団を護衛して内地と、南方を行き交うようになった。

山本は残った飛龍、蒼鶴、龍驤、飛鷹、準鷹、瑞鳳、龍鳳の七隻をトラック諸島で米軍に睨みを効かせる事にした。

だが、海では勝ったが陸は負けてしまった。

丸山中将の第二師団の将兵は雄叫びを上げながら銃剣突撃をしたが、米軍の集中砲火により壊滅した。

海軍があれ程叩いたにも関わらず、米軍は多くの物量を保持していた。

米軍は潜水艦をも使って輸送作戦に従事していたのだ。

この事に山本長官は再び戦艦による艦砲射撃と輸送船団の壊滅を思案した。

そして選ばれたのが戦艦比叡と霧島であった。

『第八艦隊は第二次挺身攻撃隊を全力で援護せよ』

それが南雲に下された命令だった。

しかし、南雲は命令を受理するどころか、トラックにいた大和に乗り込んできた。

「長門と陸奥を貸して下さい」

山本と面会の時に、南雲が第一声を放った言葉である。

南雲曰く「前回の砲撃は三十五・六センチ砲だったためにあまり米軍の陣地を破壊出来なかったはずだ。なら四十一センチ砲の長門型なら破壊力は充分だ」である。

宇垣参謀長などは長門型を出すのに反対したが、山本長官が賛成したために押し切られた。

第八艦隊は長門型二隻と艦隊護衛のために空母瑞鳳と龍鳳（二隻とも搭載機零戦二機、九七式艦攻九機）が加えられ、西村祥治少将の第七艦隊を第八艦隊に編成させた。

近藤信竹中将の第二艦隊はそのままである。

「……………もうすぐで戦いか……………」

長門の防空指揮所で艦魂である長門が前方の海を見ながら呟く。

「フッフ、米軍に四十一センチ砲の威力を思い知らせてやる……………」

長門はニヤリと笑った。

11月12日、ガダルカナル島沖

戦艦比叡と霧島がガ島沖にいた。

「三式弾装填完了しました」

「うむ」

部下からの報告に阿部中将が頷く。

「ガ島の灯火を発見ッ！！タサファロンガ岬の観測班ですッ！！」

見張り員が叫ぶ。

「よし、射撃コースへ変針せよ」

「了解。射撃コースに変針します」

航海長が復唱して射撃コースに変針した。

霧島も旗艦の航跡に続いた。

比叡の主砲がガ島に照準する。

「射撃準備よしッ！！」

砲術長の報告に阿部は頷き、躊躇なく砲撃を命じようとした時だった。

通信参謀が叫んだ。

「て、敵艦隊ですッ！！四水戦の駆逐艦夕立が『敵艦見ゆ』と報じていますッ！！」

一瞬にして比叡の艦橋内が凍りついた。

しかし、首席参謀の本多中佐がいち早く我に返り、阿部に進言した。

「まずは敵艦隊を撃滅すべきですッ！！」

阿部は頷こうとした時、ある言葉が浮かんできた。

『三式弾装填完了しました』

主砲に三式弾が装填されていたのだ。

今、敵艦隊に主砲弾を撃つても三式弾では艦艇の装甲を撃ち破るのは難しい。

阿部は決断した。

「我々本隊はまず飛行場を砲撃する。高間少将の四水戦は突撃を堪えて反転。敵艦隊を我々の方へ誘導するように伝えよッ！！」

此処に史実とは違う第三次ソロモン海戦が始まるうとしていた。

第一話 餓島（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（
）m

第二話 被弾

阿部の命令に本多は首を傾げざるを得なかった。

「司令官ッ！！この期に及んで、まだ飛行場を砲撃するおっしゃるのですかッ！！」

本多の怒号に阿部は平然として、

「敵飛行場に対し、三斉射のみ行う」

と応えたのである。

無論、首席参謀の地位にいる本多も頭脳明晰だ。

彼は阿部の言葉にすぐにピンと来た。

「……成る程。三式弾を全て撃ってしまうわけですか？」

「うむ、その通りだ。その後は君の言うとおりに敵艦隊の撃滅を優先する」

三式弾は無数の焼夷弾子が埋め込まれており、人員の殺傷や航空機、建物などの焼却には威力を発揮するが、軍艦に撃ち込んでも装甲を破る事もなく、ほとんど効果が無いのだ。

主砲の揚弾機を空にして艦船攻撃用の徹甲弾を装填するにひ無駄と分かっていても三斉射しなければならなかった。

阿部が砲撃を命じると、戦艦比叡、霧島は大急ぎでヘンダーソン飛行場に対し、三式弾を撃ち尽くしたのである。

米軍はダニエル・J・キャラガン少将が指揮を取り、重巡二、軽巡三、駆逐艦八隻の艦隊を組んでいた。

駆逐艦夕立が旗艦サンフランシスコを視認したのが二三時一〇分頃だが、サンフランシスコはその一分前から駆逐艦数隻をレーダーで捉えていた。

「レーダーが捉えたこの部隊は恐らく警戒部隊でしょう」

参謀のシエルツ中佐が言う。

「同感だ。警戒の任を帯びた駆逐艦だろう。深追いはするなよ？ 目指すはルンガ岬沖、敵の本隊のみだッ！」

キャラガンの言葉に参謀達が頷いた。

駆逐艦夕立

「取り舵ッ！！続いて全速で突っ込むッ！！」

艦橋内に駆逐艦夕立艦長吉川潔中佐の怒鳴り声が響くと夕立は後続する駆逐艦春雨を従えて、向かってくる敵艦隊の鼻面を押さえ込むように米艦隊の直前を横切ったのである。

ちなみに吉川中佐は戦国時代の武将、吉川元春の流れを汲んでいる。

米艦隊の先頭を行くのはキャラガンの座乗する重巡サンフランシスコだった。

サンフランシスコが慌てて回避する。

「い、一体何なのよ今の敵艦はッ!？」

サンフランシスコの防空指揮所で艦魂のサンフランシスコが夕立と春雨が通り過ぎた暗い海に向かって叫ぶ。

一方、夕立の一番主砲塔の上で艦魂の夕立が大笑いしていた。

「ハッハッハッ！！吉川の奴め中々やりおるわッ！！」

夕立と春雨の乗組員達は吉川の意味不明の行動に首を傾げたが、艦魂である夕立と春雨は吉川の意図が分かった。

実は吉川は敵の混乱を誘い、その混乱に乗じて、決死の突撃を挑む覚悟だったのだ。

ところが、敵艦の鼻先を横切った直後に、阿部司令官からの命令が来た。

『突撃を堪えて反転し、敵を本隊の方へ誘導せよ』

吉川は突撃を止めて、阿部の意向に沿うように行動した。

敵艦隊との距離を微妙に取りながらその動向を逐一比叡司令部に報告したのである。

無謀としか思えなかった吉川の攪乱戦法は大きな意味を持ちはじめた。

米艦隊が隊形を立て直すのに数分掛かった。

阿部の本隊は時間的猶予を得て、砲戦には無駄な三式弾を全て撃ち尽くし、既に比叡、霧島の主砲には本来の徹甲弾が装填されていた。

阿部の本隊は先制攻撃の機会を一方的に譲らなくて済む。

さらに、四水戦の夕立が敵艦隊の動きを逐一報告してくるので、阿部は臆げながらも敵の兵力や針路を予測しつつ、迎撃の態勢を整える事が出来た。

客観的に見ても、戦艦二隻を保有する日本軍のほうが有利である。

そして、戦艦比叡の見張り員が約九千メートル前方に巡洋艦と思われる敵艦四隻を認めて全軍に通報した。

ここに、史実とは異なる第三次ソロモン海戦・第一夜戦が勃発した。

阿部は夕立の情報から推測して、丁字戦法に持ち込もうと北東に向け航行したが、米艦隊は日本軍の戦艦二隻をリーダーで捉えて、既に北東へ向け変針していたので会敵したときには同航戦の構えになつた。

阿部が飛行場への砲撃を中止したのだから、その時点でキャラガンは目的の約半分を成し遂げた。

二三時二一分、比叡の見張り員が敵艦発見を報じると、阿部は躊躇なく西田艦長に探照灯の照射を許可した。

ピカアアツ！！

右舷約八千メートルの洋上に重巡らしき敵艦の影がクッキリと浮かび上がる。

「全艦砲撃開始イッ！！」

阿部は直ちに砲撃を命じ、続いて全軍に向けて戦闘開始を下令した。

ズドオオオオーンッ！！

ズドオオオオーンッ！！

旗艦比叡が主砲の砲門を開くと、後続する霧島もそれに続いた。

比叡の防空指揮所で艦魂の比叡が吠えていた。

「撃てッ！！撃って撃って撃ちまくれエッ！！」

三十五・六センチ砲だけではなく、ケースメートに装備する十五センチ副砲も敵艦に向かって撃つ。

連続射撃で艦が大きく震える。

ズガアアアアーンッ！！

ズガアアアアーンッ！！

比叡の放った三十五・六センチ砲弾は初弾から命中した。

敵の旗艦らしき重巡は大打撃を被り、艦上では早くも火災が発生している。

しかし、探照灯を点けた比叡も必然的に敵艦隊からの狙い打ちにあった。

米艦隊は比叡に集中砲火を浴びせる。

稀に見る接近戦のため、砲弾はほとんど水平に飛び交い、比叡の最上甲板から艦橋中部くらいまでの高さに多くの命中弾が集中した。

ズガアアアアーンッ！！

ズガアアアアーンッ！！

「グハアアッ！！」

被弾で比叡の身体が傷つく。

倒れそうになるが、比叡は日本刀を杖にして立つ。

「……そんな弾が私に効くと思っているのかッ！！」

比叡が吠えると、主砲の三十五・六センチ砲が火を噴く。

その砲弾は米艦隊旗艦サンフランシスコに命中した。

しかもその一発はサンフランシスコの司令塔を直撃し、艦橋ごと木っ端微塵に吹き飛ばした。

勿論艦橋にいたキャラガン少将以下全員が戦死した。

しかし、最後の悪あがきでサンフランシスコの主砲弾が比叡の艦尾に直撃した。

爆発の衝撃で出来た穴から海水が勢いよくなだれ込む。

『艦尾に命中弾ッ！！海水が舵機室に浸水して直接操舵不能ッ！！』

報告に西田大佐は人力操舵に切り替えた。

比叡は十ノットで戦場から離脱した。

第二話 被弾（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（
）m

第三話 防空（前書き）

とうとう金総書記が亡くなった……。拉致解決や北朝鮮の核廃絶は出来やすくなるのかな……。

第三話 防空

比叡が戦場を離れた後、第四水雷戦隊司令官の高間完少将は状況の整理のために一旦、全艦の集結を命じた。

米軍は指揮官キャラガンが戦死、更には次席指揮官のスコット少将も夕立からの砲雷撃を受けて乗艦のアトランタと共に戦死した。

アトランタに止めを刺したのは三本の酸素魚雷だった。

しかし、夕立も無傷では済まず、被弾炎上して遂に負傷した吉川から退艦命令が出された。

損傷した夕立は撃沈処分として、夕立へ魚雷を発射した僚艦の春雨から最期を見送られながらソロモンの海に沈んだ。

対する米軍は巡洋艦サンフランシスコ、アトランタ、駆逐艦二隻が撃沈した。

客観的に日本軍は戦艦比叡が大破、駆逐艦夕立、暁が沈没なので米軍が不利である。

高間少将は米軍を大分叩いたと判断をして、全艦の戦場離脱を命じた。

先に戦場を離脱した比叡を守るために……。

「比叡姉様。傷の具合は如何ですか？」

比叡の防空指揮所に、比叡の妹である霧島が転移をしてきた。

霧島は眼鏡をかけ、腰近くまである長髪の風貌である。

対して比叡は、左目に包帯が巻かれて、左目の辺りからの部分から血が滲んでいた。

「……大分良くなったわ。排水も上手くいつているみたい」

「敵機来襲ウツッ!!」

その時、比叡の見張り員が叫んだ。

『ウウウウーッ!!』

全艦に空襲警報のサイレンが鳴り響く。

「対空戦闘用意ッ!!」

「対空戦闘用意ッ!!」

乗組員が慌ただしく動き出す。

「……後少して南雲中将と合流が出来るのに……」

阿部は悔しげに言う。

「機種はSBDドントレス。数は十六機ッ……」

見張り員が逐一報告をしてくる。

「主砲砲撃開始ッ……」

ズドオオオーンッ……！！

対空用砲弾である三式弾を装填した三十五・六センチ砲が火を噴く。

ドントレス隊はそれを回避して損傷した比叡に向かってくる。

「……やむを得ないか。速度を上げ「新たな航空機ッ……」何ッ……」

阿部が上空を見た時、先頭機のドントレスが火を噴いて墜落をしていた。

「二式水戦ですッ……！数は六機ですッ……」

「レカタの水上基地から来たのか……」

ソロモン諸島のイサベル島のレカタには海軍の水上基地があり、二式水戦や零式水偵などが多数あった。

レカタの基地司令官は南雲艦隊からの零戦が来るまでとして独断で二式水戦六機と対潜哨戒機として零式水偵を派遣したのだ。

その直後には南雲艦隊からの零戦十二機も到着した。

阿部艦隊を襲おうとしたドントレス十六機は全て落とされた。

以後、何回かの空襲があったが、南雲艦隊から飛来した零戦が全て追い払ってくれた。

そして17:00に阿部艦隊は近藤、南雲艦隊と合流をした。

「南雲長官。近藤中将旗艦愛宕より発光信号です」

「何？」

いきなりの愛宕からの発光信号で南雲は首を傾げた。

「近藤さんは何と言っているんだ？」

「は。……艦隊の指揮権を南雲長官に譲ると言っています」

「何い？」

更に詳しい事が報告された。

『南雲君。私は確かに第二艦隊長官だが、夜戦の指揮をした事はあ

まりない。だが、君はミッドウエー、第一次ソロモンで夜戦と海戦を指揮している。敵を確実に倒すなら君が一番適任だと私は思い、指揮権の委譲をしたのだ」

簡単に説明すればこうである。

「近藤さん……そこまで俺を買っているのか……」

南雲は軍帽を深く被る。

その時、何かキラリと光る物があった。

「……よし、愛宕に伝えてくれ。指揮官の任務は引き受けよう」

南雲は指揮官の任務を引き受けた。

こうして、全体的の指揮官は第二艦隊司令長官の近藤信竹中将だが、ガ島突入時の指揮官は南雲忠一中将が取る事になった。

連合艦隊司令部には後日報告になり、一悶着が起きるのは些細な事だった。

「よし、ガ島に突入するッ!!」

空母瑞鳳、龍鳳は駆逐艦四隻と共に後方へ退避して残りはガダルカナル島に向かったのである。

第三話 防空（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第四話 艦隊決戦

ニューカレドニア

「何ッ！？敵コンゴウ級は沈まなかつただとッ！！」

ニューカレドニア島のヌーメアにあるアメリカ海軍南太平洋艦隊司令部で南太平洋艦隊司令長官のウィリアム・F・ハルゼー中将が激怒していた。

「手負いの戦艦を沈められんとは航空隊は何をしているんだッ！！」

ハルゼーは喚き散らす。

「リーの戦艦部隊でジャップを追い払えッ！！」

ハルゼーは念のためにと、ガタルカナル東方海上に新鋭戦艦二隻を出撃させていた。

司令官はウィルス・A・リー少将であり、部隊は戦艦ワシントンとサウス・ダコタに、駆逐艦四隻だった。

戦艦ワシントン

「フ。ブルは我々に戦いの場を与えてくれたようだ」

ワシントンの艦橋でリー少将がニヤリと笑う。

「全艦は直ちにガタルカナルへ向かう」

六隻の艦隊はガタルカナルへと向かった。

旗艦長門

「長門型と金剛型を分離するのですか？」

第八艦隊参謀長の大西新蔵少将が南雲に言う。

「うむ。比叡は十八ノットしか出ないみたいだから比叡と霧島はガ島砲撃をさせる。それに元々の目的はガ島砲撃だ」

「確かに……分かりました。早速手配します」

そして比叡と霧島には駆逐艦電と照月の二隻が護衛して司令官は引き続き阿部中將になった。

21:00

南雲中将はサボ島の南水道からの突入を決意して艦隊を南水道に向けていた。

そして21:00過ぎ、米軍の駆逐艦が艦隊を発見した。

しかしこの艦隊は南雲艦隊の前方約八キロに警戒部隊としていた高間完少将率いる第四水雷戦隊の駆逐艦朝雲、時雨、白露、夕暮の四隻だった。

一方、第四水雷戦隊も米軍の駆逐艦を視認していた。

「砲撃開始ッ!!」

高間は即座に沈める事にした。

ズドオオオンッ!!

駆逐艦が搭載する十二・七センチ砲が火を噴き、米駆逐艦の至近に着弾する。

ズドオオオンッ!!

対して米駆逐艦は星弾を撃ち上げた。

「ちッ!!知らされたかッ!!」

高間は悔しそうに言う。

旗艦長門

「南雲長官、照明弾ですッ!!」

「比叡と霧島はガ島を砲撃せよ。残りは全て四水戦の応援へ向かえッ!!」

直ちにガ島砲撃部隊と分離して南雲艦隊は第四水雷戦隊の方向へ行く。

戦艦ワシントン

「敵駆逐艦の後方から戦艦二隻を含む艦隊が接近中ッ!!」

「敵戦艦はコンゴウ級だな。コンゴウ級の主砲は十四インチ砲。対して我々のワシントンとサウス・ダコタの主砲は十六インチ砲。充分に勝機があるな」

リー少将がニヤリと笑う。

「同航戦に展開せよッ!! ジャップの旧式戦艦など、我々の十六インチ砲で沈めてやるッ!!」

米海軍一の砲術屋であるリーはそう宣言した。

しかし新たに撃ち上げた星弾で南雲艦隊を見た見張り員が慌てて報告してきた。

「敵戦艦はコンゴウ級ではありませんッ！！ナガト級ですッ！！」

『ッ！？』

リー少将達の顔は凍りついた。

戦艦比叡

「今頃、米軍共は驚いてるだろうな」

「あらどうして？」

見張り員である加藤清孝上等水兵が呟いた言葉を、左目が包帯に巻かれた比叡が尋ねる。

「比叡と霧島だと思った戦艦が実は長門と陸奥だった……なんて、四十一センチ砲の戦艦を目の前にしたら米軍は逃げるだろうな」

「あら？じゃあ私達では逃げないとも？」

「い、いや別にそう言つつもりで言ったわけじゃ……」

「おい加藤。比叡と話すのはいいがしつかり見張れよ」

「す、すみません」

加藤は見張り員を仕切る特務少尉に怒られた。

この時、ガ島砲撃部隊である比叡と霧島は既に砲撃位置にいた。

既に主砲には三式弾が装填されて、ガ島に砲身を向けていた。

「砲撃を開始するぞッ！！」

特務少尉が叫んだ瞬間、比叡と霧島が搭載する三十五・六センチ砲が火を噴いた。

目標はガ島にある米航空基地のヘンダーソン飛行場だった。

第四話 艦隊決戦（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第五話 艦隊決戦二（前書き）

皆様新年明けましておめでとございませう。今年もよろしくお願
いします。m () m

第五話 艦隊決戦二

ガダルカナル島、ヘンダーソン飛行場

ズドオオオーンッ！！

「な、何だ一体ッ！？」

いきなりの轟音に、ガダルカナル島守備隊司令官のバンデグリフト少将は驚いて司令部を飛び出した。

ヒュルルル……ズガアアアーンッ！！ズガアアアーンッ！！

「うわアッ！？」

滑走路がいきなり爆発をして、その爆風がバンデグリフトを吹き飛ばした。

「グウ……………」

バンデグリフトは身体の痛みに耐えながら起き上がる。

「……………何て事だ……………」

バンデグリフトは滑走路を見て啞然とした。

滑走路は艦砲射撃を受けていた。

「……まさか戦艦かッ!!」

バンデグリフトは断言した。

以前にも敵戦艦からの艦砲射撃を受けてヘンダーソン飛行場は壊滅に近い状態に陥った時があったのだ。

ヒュルルル……ズガアアアーンッ!!ズガアアアーンッ!!

沖合にいる戦艦からの砲弾が滑走路に突き刺さる。

「対艦砲に砲撃をさせるッ!!」

「サーッ!!」

海岸線には対艦砲が設置されていたが、よくて駆逐艦クラスの対艦砲であった。

「消火活動を急がせるッ!!」

海兵や陸兵達は艦砲射撃に耐えながら消火活動を開始するが、滑走路にあったF4FやP40、SBD『ドントレス』が破壊され、その破片が兵達を襲い消火活動は捗らなかった。

戦艦比叡

「やっと飛行場を砲撃出来たか……」

「はい。南雲艦隊が米艦隊と艦隊決戦をしています。この隙に飛行場の壊滅をしませんと……」

「そうだな」

参謀の言葉に阿部が頷く。

「飛行場周辺のジャングルを三式弾で焼き払え。陸軍が突撃する時に畏があつたら困るからな」

「了解。霧島に伝えます」

戦艦霧島

「了解した。目標を滑走路から飛行場付近のジャングルに変更ツ！
！弾種は三式弾ツ！！」

「了解ツ！！」

霧島の三十五・六センチ砲はジャングルに照準し直して砲撃を始めた。

ヘンダーソン飛行場周辺のジャングルは日本軍の襲撃に備えて、

多数の罨や機関銃座、野砲が設置されていたが霧島の砲撃によってジャングルは焼き払われ、壊滅に近い状態になった。

このおかげで、第三八師団と太田実陸戦隊の突撃がしやすくなった。

「司令官ッ！！対岸のツラギから敵魚雷艇が接近しますッ！！」

「左舷副砲と高角砲、機関銃は敵魚雷艇を狙えッ！！駆逐艦電は敵魚雷艇へ突入ッ！！駆逐艦照月は比叡と霧島を護衛せよッ！！」

阿部からの命令を受けた駆逐艦電は敵魚雷艇へ突撃を開始した。

「主砲はこのまま砲撃を続行せよッ！！」

阿部は砲撃を続行させた。

戦艦長門

「敵艦の数はッ！？」

「高間少将からの報告では戦艦二、駆逐艦四隻の艦隊のようです」

南雲の言葉に参謀長の大西が答える。

「水偵は発進したのか？」

「は。今から発艦します」

バンツ！！

長門に搭載されたカタパルトから零式水偵が発艦する。

ズドオオオーンツ！！

ヒュルルル……ズシャアアアーンツ！！ズシャアアアアーンツ！！

「……近いな」

「恐らくは情報による電探射撃をしているのでしょう」

「探照灯は付けるな。めった打ちにされるからな」

南雲が全艦に通達しようとした時だった。

ピカアアアツ！！

近藤中将が座乗している重巡愛宕から探照灯が付けられてリー少将の艦隊が克明に闇夜に映し出された。

「まさか近藤さんは……」

南雲は絶句した。

ヒュルルル……ズシャアアアアーンツ！！ズシャアアアアアアーンツ！！

「愛宕の周りに水柱が立ち上る。」

「敵戦艦に照準せよッ!!!」

「砲撃用意よしッ!!!」

長門と陸奥の四十一センチ砲が敵戦艦 ワシントンに照準する。

「撃エエエッ!!!」

ズドオオオー!!!

長門と陸奥の四十一センチ砲が火を噴いた。

ヒュルルル……………。

「弾ちやあく……………今ッ!!!」

ズシャアアアアーンッ!!!ズシャアアアアアーンッ!!!

「遠、遠、近ッ!!!」

「誤差修正下方二度ッ!!!」

主砲が下へ少し下がる。

「砲弾準備完了ッ!!!」

「撃エエエッ!!!」

ズドオオオーンッ!!

ズガアアアーンッ!!

『ッ!?!』

突然、探照灯を付けていた愛宕が被弾した。

第五話 艦隊決戦二（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第六話 艦隊決戦三

重巡愛宕艦橋

ズガアアアーンッ！！

『ッ！？』

砲弾が命中した衝撃で艦が揺れる。

「被害を知らせろッ！！」

命中の衝撃で床に倒れた近藤が叫ぶ。

「後部四番砲塔に命中ッ！！四番砲塔にいた者全員戦死ッ！！更に衝撃で後部五番砲塔旋回不能ッ！！」

服が血まみれになった伝令が艦橋に駆け込んできてそう報告する。

「更に水偵用の飛行甲板に命中ッ！！カタパルトが吹っ飛ばされましたッ！！」

「敵艦隊との距離はッ！？」

「約二万一千ですッ！！」

近藤の叫びに見張り員が答える。

「砲戦距離までもう少しだ。もっと近づけるッ！ー長門と陸奥を沈めさせてはならんッ！ー！」

近藤が吠える。

近藤は長門と陸奥の被害を無くすために自艦である愛宕を囮にしたのだ。

その艦魂である愛宕は防空指揮所で全身血まみれの状態だった。

「……はあ……はあ……長門さんと陸奥さんを沈めさせないためなら私の命を差し出しますよ。………」

愛宕は日本刀を支え棒にして立ち上がる。

「……さあ……ドンドンと私を狙うのよッ！ー私が戦艦よッ！ー！」

愛宕が言い終わるとワシントンとサウス・ダコタから放たれた砲弾が愛宕周辺に落下して水柱を上げた。

長門防空指揮所

「……愛宕ッ！ー！」

長門は自分の双眼鏡で愛宕を見る。

愛宕の周辺に砲弾が夾叉していた。

後数回で愛宕に命中するのも必然になってきた。

ズドオオオーンッ！！

長門と陸奥の四十一センチ砲が火を噴いた。

愛宕が必死に探照灯を付けているために狙いは定めやすかった。

ズシャアアアーンッ！！

ズガアアアーンッ！！

ワシントンに十六発の砲弾が降りかかった。

遂にワシントンに三発が命中した。

「敵先頭艦に命中弾ッ！！」

「よし、ドンドン撃てッ！！」

南雲は士気を鼓舞する。

その時、敵艦隊から強烈な光が発せられた。

零式水上観測機（通称零観）が照明弾を投下したのである。

「探照灯が無ければ見事な背景照明だッ！！愛宕に打電だッ！！探照灯を消すんだッ！！」

南雲が叫ぶ。

南雲の指示は急いで愛宕に伝わり、近藤も漸く探照灯を消した。

しかし、愛宕は炎上しており、その火災を目印にワシントンとサウス・ダコタは砲撃を続けた。

重巡愛宕艦橋

「ハッハッハ。こりゃあスリルがあるな」

愛宕の周辺に立ち上る水柱を見て近藤が笑う。

「ちよ、長官……………」

参謀が啞然とする。

「なあと、愛宕が粘ればその分、長門と陸奥は砲撃をしやすくなる。艦長、之字運動の正確さを敵に見せてやれッ！！」

「了解ですッ！！取舵二十ッ！！」

近藤の言葉に愛宕艦長の伊集院松治大佐が頷く。

愛宕は未だに健在であった。

戦艦ワシントン艦橋

「消火急げッ！！」

リー少将は火災が発生している左舷両用砲群を見ながら叫んだ。

命中した三発のうち、二発は左舷両用砲群に命中して直撃した両砲員達を消滅させていた。

残り一発はカタパルトを吹き飛ばした。

「敵の観測機を撃ち落とせッ！！」

生き残っていた両用砲が上空に砲弾を打ち上げるが、何処にいいのか全く分かってなかった。

そして、再び長門と陸奥から砲弾がワシントンに落下して殆どが命中した。

「砲撃目標を敵先頭艦から敵二番艦に変更せよ。第七艦隊の西村に打電。全艦突撃せよッ！！しびとい奴には魚雷が一番だからな」

南雲はそう言う。

更に、軽巡長良、白雪、敷波、綾波、朝雲も突撃を開始する。

敵艦隊との距離は一万二千になっていた。

ズガアアアアーンッ！！

「陸奥被弾ッ！！」

サウス・ダコタからの砲撃が陸奥に命中した。

砲弾は陸奥の後部三番砲塔に直撃したが、跳ね返され、その直後に爆発した。

幸いにも三番砲塔から死者は出なかったが、衝撃の影響で三番砲塔は旋回不能になった。

先頭艦のワシントンも撃っているが、散発的であった。

ワシントンの前部一番砲塔付近の甲板に砲弾が命中して一番砲塔は砲撃不能し、二番砲塔も衝撃の影響で故障していた。

唯一、三番砲塔が果敢に砲撃をするが、駆逐艦朝雲、白雪、綾波が距離七千から必殺の酸素魚雷を発射した。

第六話 艦隊決戦三（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2061i/>

ミッドウェイ海戦 i f

2012年1月4日11時47分発行